

新課程「数学・理科」初年度「基幹3教科」平均点合計(600点満点)

「国語+数学(I・A+II・B<旧科目含む>)+英語」は、 4.7点アップの341.0点(得点率 56.8%)!

- 国語+20.6点、数学I・A-0.8点、数学II・B-14.6点、英語-0.4点。
- 理科「基礎科目」受験選択率 24.5%、「発展科目」(旧科目含む)50.9%。
- 平均点差：旧・物理I - 生物=20点以上、理科②で「得点調整」実施!

旺文社 教育情報センター 27年2月

27年センター試験は新課程「数学・理科」による最初の実施で、旧課程履修者には旧課程科目も用意され(経過措置)、出願教科・科目は6教科・40科目に及んだ。志願者55万9,132人、受験者53万537人で、ともに前年比0.3%減となる2年連続の減少である。

主に理系志望者が受験する理科②では、高得点の旧・物理Iと新課程の生物との平均点差が20点以上となり、17年ぶりに「得点調整」が実施された。

大学入試センターから発表された実施結果を基に、過去のデータも含めてセンター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

■「教科・試験枠」別の受験選択率

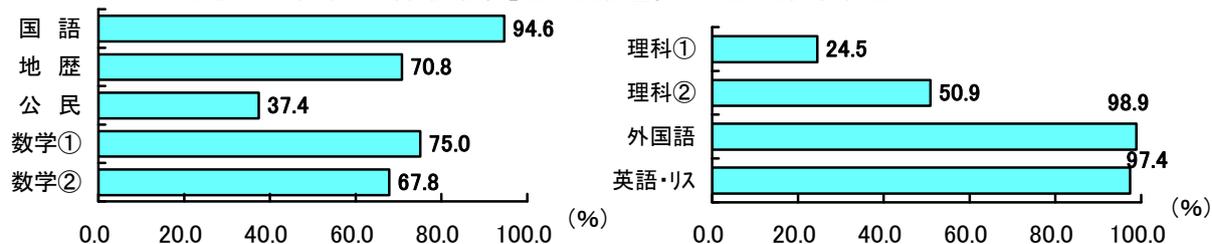
◎ 各「教科・試験枠」別の受験者数の全受験者数(53万537人。追・再試験含む実数)に占める割合(受験選択率=各「教科・試験枠」受験者数÷全受験者数×100)をみってみる。

例年、センター試験(以下、セ試)受験者のほとんどが受験する外国語(筆記)受験者は52万4,506人で、受験選択率は98.9%、英語のリスニングは97.4%。国語は94.6%であった。

新課程「理科」のセ試科目は、理科4領域において、それぞれ「基礎を付した科目」(標準2単位：以下、「基礎科目」と「基礎を付していない科目」(標準4単位：以下、「発展科目」)の計8科目に再編された。「基礎科目」は理科①の試験枠に配置され、「発展科目」は理科②の試験枠に旧課程科目とともに配置された。

理科①(基礎科目)の受験者数は約13万人で、セ試全受験者数に占める受験選択率は24.5%/理科②(発展科目+旧課程科目)の受験者数は約27万人、受験選択率50.9%で、「基礎科目」の受験選択率は全「教科・試験枠」中、最低だった。

●センター試験「教科・試験枠」別の受験選択率(追・再試験含む)



注. ① 「教科・試験枠」別の受験選択率=各「教科・試験枠」受験者数÷全受験者数×100。
 ② 各「教科・試験枠」の受験者数は実受験者数。全受験者数は530,537人。
 ③ 数学①、数学②、理科②には、旧課程科目を含む。理科①は新課程「基礎科目」、理科②は新課程「発展科目」と旧課程科目。
 ④ 外国語は英語を含む筆記試験、「英語・リス」は英語のリスニング。

■ 基幹3教科の平均点合計

◎ セ試平均点には、地歴、公民、理科「発展科目」(旧科目含む)における各科目の「第1解答」(100点満点)と「第2解答」(100点満点)の得点、及び理科「基礎科目」(50点満点)の“2科目受験必須”の得点が混在し、それらの教科における各科目の平均点の実態は把握しにくい。

そのため、平均点の動向をみる一つの視点として、国公立大の文系・理系に共通の“基幹3教科”である国語、数学、英語の平均点合計を大学入試センターから発表された科目別平均点等の「確定値」を基に算出した。

国語／数学(数学Ⅰ・A＋数学Ⅱ・B<旧課程科目含む>)／英語の平均点合計(600点満点)は、次のとおりである。

国語＋数学(数学Ⅰ・A＋数学Ⅱ・B<旧課程科目含む>)＋英語＝341.0点

<前年差：＋4.7点、得点率56.8%>

■ 「5教科6科目」の加重平均点

◎ 国公立大受験のセ試科目の標準の目安となる、文系・理系に共通な「5教科6科目」(国語／地歴・公民<合わせて1科目>／数学<数学①と数学②の2科目：旧課程科目含む>／理科<理科①・理科②合わせて1科目：旧課程科目含む>／外国語)の加重平均点(800点満点)を算出した。

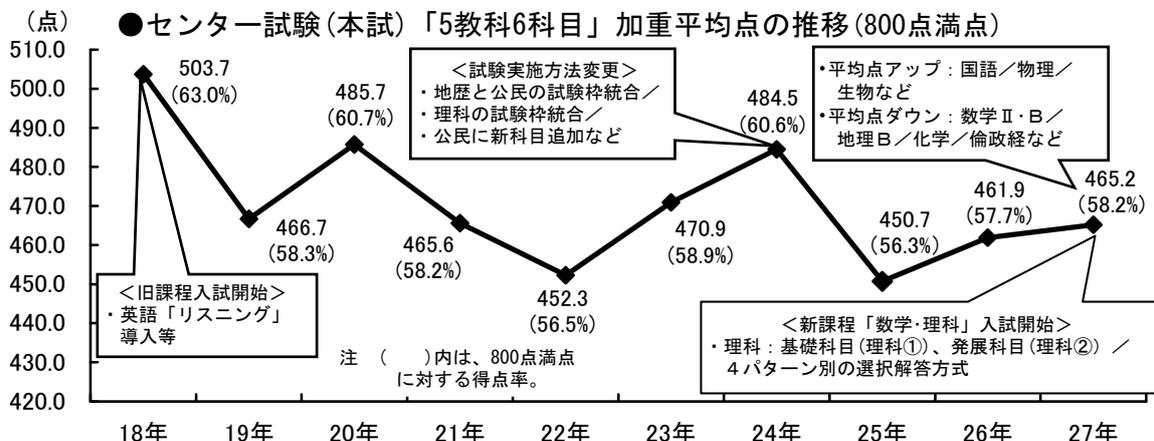
27年の結果は、次のとおりである。

「5教科6科目」(800点満点)＝465.2点

<前年差：＋3.3点、得点率58.2%>

これまでのセ試「5教科6科目」の加重平均点の推移をみると、学習指導要領改訂に伴う出題教科・科目や内容等の変更、実施方法の変更などの初年度は、概して平均点は高めになる傾向がある。

前回の新課程入試(18年)の「5教科6科目」加重平均点は503.7点(800点満点：得点率63.0%)と、この9年間では最も高い。また、24年の実施方法等の大幅変更(地歴・公民、理科の試験枠統合、公民に新科目設置など)の際は、484.5点(同60.6%)であった。



注. 大学入試センター発表の各科目別平均点と受験者数(本試験。理科「基礎科目」は追・再試験含む)から算出。国語(200点満点)の平均点／地歴と公民を合せて1教科・1科目とした加重平均点(100点満点)／数学①の加重平均点(100点満点)／数学②の加重平均点(100点満点)／理科①と理科②の加重平均点(100点満点：「基礎科目」<50点満点>は2科目受験者<100点満点：追・再試験含む>の加重平均点)／外国語の加重平均点(200点満点)を合計(800点満点)。18年と27年は旧課程対応の「経過措置」科目(旧課程科目)含む。27年は「得点調整」後の平均点。

平成27年度 大学入試センター試験 平均点等一覧(本試験:確定集計)

＜平成27年2月5日 大学入試センター発表＞

教科	科目	平成27年		平成26年		平均点 対前年差	受験者数 対前年差	
		受験者数	平均点	受験者数	平均点			
基幹3教科 平均点合計(600点満点) 【国語+数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B+英語(200点換算)】		- (得点率)	341.0 56.8%	- (得点率)	336.3 56.1%	4.7 (点)	- (人)	
国語(200点)	国語	501,415	119.2	503,587	98.7	20.6	▲ 2,172	
地理歴史・公民	地理歴史(100点)	世界史A	1,376	47.4	1,422	47.8	▲ 0.4	▲ 46
		世界史B	84,053	65.6	85,943	68.4	▲ 2.7	▲ 1,890
		日本史A	2,409	45.6	2,612	47.7	▲ 2.1	▲ 203
		日本史B	155,273	62.0	153,204	66.3	▲ 4.3	2,069
		地理A	1,843	51.4	2,028	51.8	▲ 0.4	▲ 185
		地理B	146,846	58.6	146,472	69.7	▲ 11.1	374
	公民(100点)	現代社会	76,698	59.0	77,825	58.3	0.7	▲ 1,127
		倫理	30,740	53.4	33,761	60.9	▲ 7.5	▲ 3,021
		政治・経済	45,300	54.8	48,363	53.9	0.9	▲ 3,063
		倫理、政治・経済	48,659	59.6	48,789	67.3	▲ 7.7	▲ 130
数学	数学①(100点)	数学Ⅰ	5,277	32.4	7,187	39.7	▲ 7.3	-
		数学Ⅰ・数学A	338,406	61.3	391,273	62.1	▲ 0.8	-
		旧数学Ⅰ	627	33.2	7,187	39.7	▲ 6.5	-
		旧数学Ⅰ・旧数学A	53,118	70.3	391,273	62.1	8.3	-
	数学②(100点)	数学Ⅱ	4,944	23.8	6,333	32.8	▲ 9.0	-
		数学Ⅱ・数学B	301,184	39.3	355,423	53.9	▲ 14.6	-
		工業数理基礎	35	55.0	33	60.9	▲ 5.9	2
		簿記・会計	1,266	66.5	1,249	62.5	4.0	17
		情報関係基礎	462	52.0	482	63.3	▲ 11.3	▲ 20
		旧数学Ⅱ・旧数学B	51,700	49.9	355,423	53.9	▲ 4.0	-
理科	理科①(50点)	物理基礎	13,289	31.5	-	-	-	-
		化学基礎	88,263	35.3	-	-	-	-
		生物基礎	116,591	26.7	-	-	-	-
		地学基礎	41,617	27.0	-	-	-	-
	理科②(100点)	物理	129,193	64.3	160,823	61.6	2.7	-
		化学	175,296	62.5	233,632	69.4	▲ 6.9	-
		生物	68,336	55.0	188,400	53.3	1.7	-
		地学	1,992	40.9	17,668	50.2	▲ 9.3	-
		旧理科総合A	431	57.8	9,172	48.2	9.5	-
		旧理科総合B	730	55.3	13,926	53.4	1.9	-
		旧物理Ⅰ	29,832	69.9	160,823	61.6	8.3	-
		旧化学Ⅰ	43,347	66.7	233,632	69.4	▲ 2.8	-
		旧生物Ⅰ	22,026	60.9	188,400	53.3	7.6	-
		旧地学Ⅰ	2,893	58.7	17,668	50.2	8.5	-
外国語(200点)	英語	筆記(200点)	523,354	116.2	525,217	118.9	▲ 2.7	▲ 1,863
		リスニング(50点)	516,428	35.4	519,172	33.2	2.2	▲ 2,744
		筆+リ(200点換算)	-	121.2	-	121.6	▲ 0.4	-
	ドイツ語	135	144.8	147	155.4	▲ 10.6	▲ 12	
	フランス語	142	148.3	134	155.7	▲ 7.4	8	
	中国語	427	158.6	449	148.1	10.5	▲ 22	
	韓国語	143	139.1	161	144.8	▲ 5.8	▲ 18	

＜注＞

- 英語の平均点(200点)は、「筆記」(200点)＋「リスニング」(50点)の250点満点を200点に圧縮換算。
- 大学入試センター発表の科目別平均点は小数第2位の表示だが、旺文社では小数第1位で表示。
- 表中の「平均点対前年差」は、四捨五入の関係で「27年-26年」と一致しない場合もある。
▲印はダウン、又は減少を示す。薄網をかけた科目は旧課程科目を示す。
なお、新・旧課程の数学・理科の受験者数「対前年差」は-を付した。
- 理科②の新課程科目(発展科目)の平均点差は、前年の旧課程科目(各Ⅰ科目)との差である。
- 27年の数学・理科の旧課程科目を含む「得点調整」対象科目における最大差(約53万人集計時)が、「物理Ⅰ」(旧課程科目)－「生物」(新課程科目)で21.54点となったため、理科②で得点調整が実施された。
上表は得点調整後の数値である。

旺文社 教育情報センター(平成27年2月6日)



■英語;筆記-2.7点、リスニング+2.2点で、「筆記+リスニング」は0.4点ダウン!

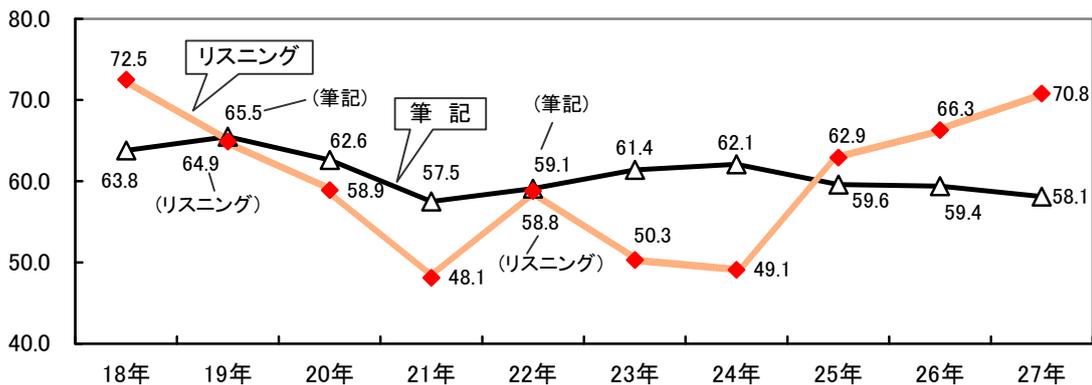
◎ 27年の英語の平均点は筆記が2.7点ダウン、リスニングが2.2点アップし、全体(筆記+リスニング:250点満点を200点満点に圧縮換算)では0.4点ダウンの121.2点だった。

平成2(1990)年のセ試開始から27年までの英語の平均点(2年~17年までは筆記のみ、18年以降は筆記+リスニング)の推移をみると、6年にこれまで最低の96.4点(得点率48.2%)を記録した後、V字回復を果たし、得点率はほぼ5割台半ば~6割台を推移している。最近は、23年118.4点(得点率59.2%)→24年119.0点(同59.5%)→25年120.5点(同60.2%)→26年121.6点(同60.8%)→27年121.2点(同60.6%)と、6割台をキープ。

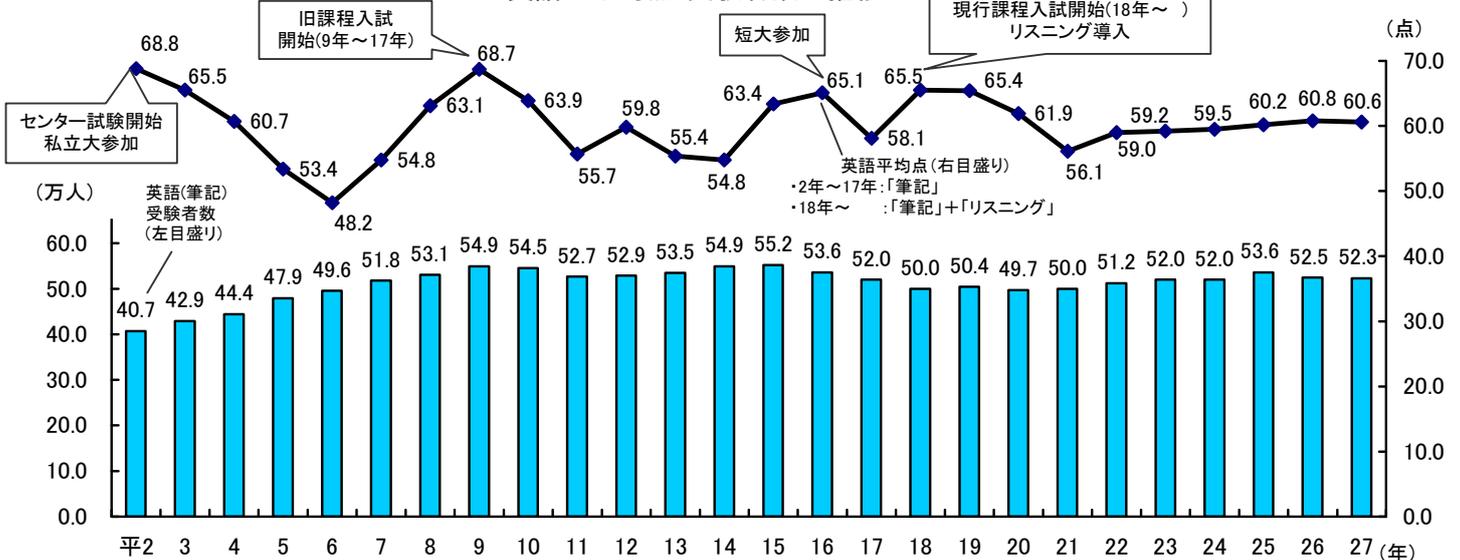
◎ 筆記は、21年に115.0点(200点満点、得点率57.5%)と6割を割った後、22年118.1点(同59.1%)から24年124.2点(同62.1%)まで上昇傾向にあったが、25年119.2点(同59.6%)→26年118.9点(同59.4%)→27年116.2点(同58.1%)と、3年連続ダウンした。

一方、リスニングは、18年の導入時に平均点36.3点(50点満点、得点率72.5%)の高得点を示した後、21年の24.0点(同48.1%)まで、3年連続の急降下。22年は上昇(29.4点、得点率58.8%)したが、23年(25.2点、同50.3%)→24年(24.6点、同49.1%)と2年連続ダウン。25年(31.5点、同62.9%)は3年ぶりの上昇に転じ、26年(33.2点、同66.3%)→27年(35.4点、同70.8%)と3年連続アップ。27年は初回(18年)に次ぐ7割台である。

●英語:「筆記」&「リスニング」の得点率の推移



●英語の平均点・受験者数の推移



注. ① 折れ線グラフは、平成2年~17年における「筆記」(200点満点を100点満点に換算)の平均点、18年以降における「筆記」(200点満点)+「リスニング」(50点満点)の平均点(250点満点を100点満点に圧縮換算)を表示。 ② 棒グラフは、「筆記」の受験者数を表示。

■ **国語**; 平均点、前年の“過去最低”から一転、+20.6 点の大幅アップで得点率 59.6% !

◎ 例年、セ試では英語に次いで受験者の多い国語について、前回の旧課程入試の始まった 9 年～27 年までの平均点(200 点満点を 100 点満点に換算)と受験者数、及び共通 1 次試験も含めた得点率の推移を下図に示した。

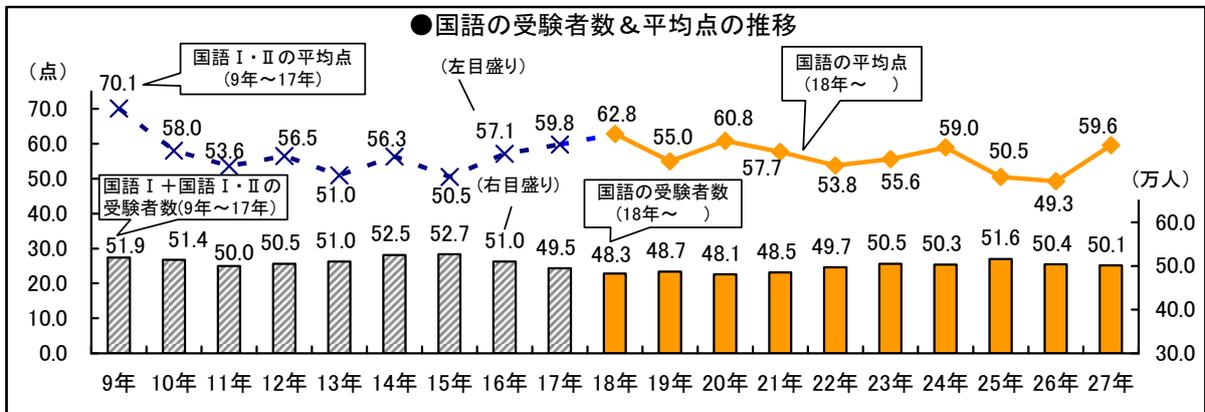
◎ 9 年の国語 I・II (9 年～17 年までは、国語 I と国語 I・II の 2 科目。受験者数は圧倒的に国語 I < 国語 I・II) の平均点は 140.2 点と高得点であったが、10 年には大幅にダウン。その後は 100 点台～110 点台のアップ・ダウンを繰り返し、15 年には 101.1 点の低得点を記録。

最近は得点率を 6 割直前まで回復していたが、25 年は現代文の難化で、それまでの最低点(15 年の 101.1 点)より若干低い 101.0 点となった。26 年は、古文の難化などで平均点は 98.7 点まで下降。共通 1 次試験(昭和 54<1979>年～平成元年<1989>年：11 回実施)とセ試(平成 2 年～)を通して初めて平均点が 50% を割り、過去最低となった。

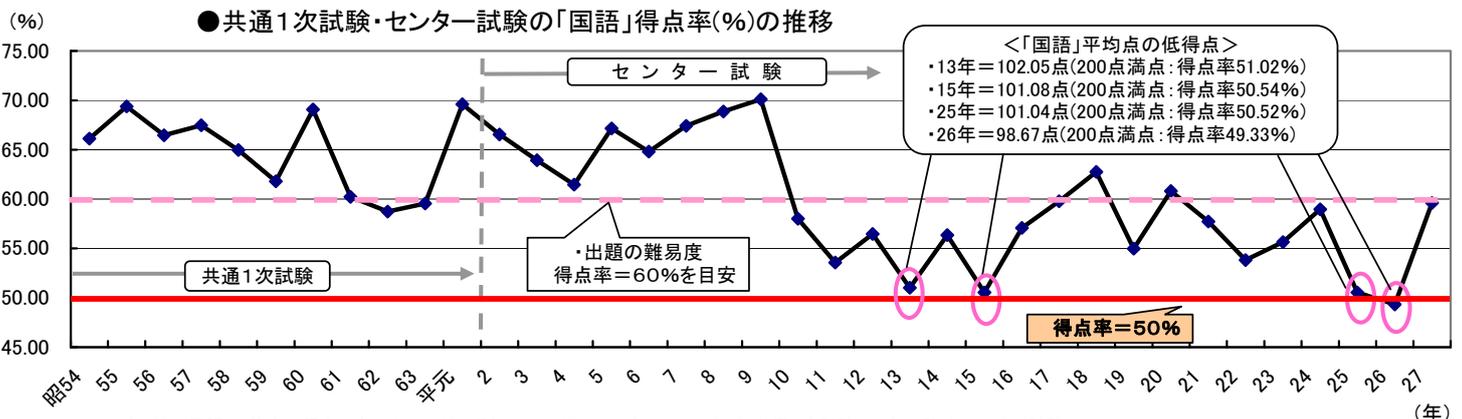
◎ 27 年は、標準的な出題で易化したことなどから、平均点は前年より 20.6 点の大幅アップとなり、得点率も上昇して 59.6% まで回復した。

◎ 国語の得点率は、概して「共通 1 次」時代と「セ試」時代の前半(平成 9 年まで)はほぼ 60% 以上(昭和 62・63 年はわずかに 60% 割れ)の高得点率、それ以降は、現行課程入試開始(18 年～)当初はやや高かったが、ほぼ 50% 台半ば～後半で推移。しかし、25・26 年は急落。

因みに、「共通 1 次」時代における国語の得点率の平均は 60% 台半ばで、得点率 60% 未満の試験は 11 回中、2 回のみである。一方、「セ試」時代の国語の得点率の平均は 60% 未満で、得点率が 60% 未満だった試験は 26 回中、16 回に及ぶ。



注 1. 旧課程入試(9 年～17 年)は、国語 I 及び国語 I・II の 2 科目出題。新課程(現行課程)入試(18 年～)では、国語 1 科目のみの出題。 2. 200 点満点を 100 点満点に換算。



注 ① 「国語」平均点の得点率を示す。 ② 昭和54(1979)年～平成元(1989)年は「共通 1 次試験」、2 年以降は「センター試験」。 ③ 9 年～17 年の旧課程入試では、「国語 I」「国語 I・国語 II」の 2 科目出題。ここでは、「国語 I・国語 II」の得点率を示す。

■**数学**; 数学Ⅰ・Aは-0.8点、数学Ⅱ・Bは-14.6点の大幅ダウンで“過去最低”の39.3点！

◎ 27年の数学は、新課程に沿って出題された。そのため出題範囲・内容は新しい学習指導要領に対応して変更されたが、平均点等の前年比較は新・旧課程の同一名称の科目間でみる。なお、旧課程履修者用に、旧数学Ⅰ、旧数学Ⅰ・A、旧数学Ⅱ・Bも出題された(経過措置)。

セ試開始(2年)以降、27年までの26回に及ぶ数学Ⅰ・A(2年～8年までは旧・数学Ⅰ)と、数学Ⅱ・B(2年～8年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

◎ 数学Ⅰ・A(旧・数学Ⅰ含む。以下、同)のこれまでの最低点は22年の49.0点で、セ試開始以降初めて5割を割った。最高点は12年の73.7点で、最高点と最低点との較差は24.7点。

一方、数学Ⅱ・B(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点をみると、新課程初年度となる27年の39.3点、最高点は6年の77.2点で、その較差は37.9点に達する。

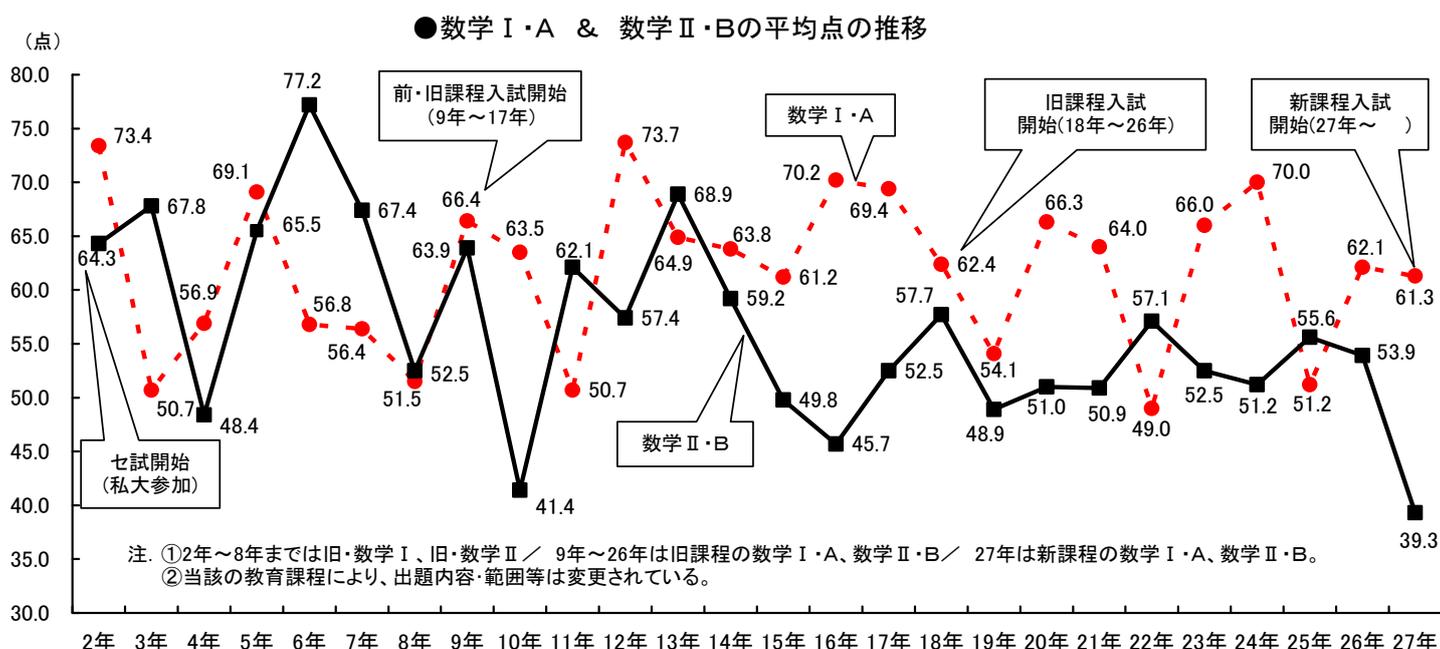
◎ 数学Ⅱ・Bの平均点は27年も含め、過去26回の試験(本試験)で50点未満が6回もあって変動幅も大きいのに対し、数学Ⅰ・Aの平均点50点未満は22年の1回のみである。

数学Ⅱ・Bは出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、数学Ⅰ・Aに比べ、難易や問題量などによって不安定な平均点を示しているとみられる。

◎ 最近の数学Ⅰ・Aの平均点は、22年にこれまで唯一の50点割れとなった49.0点まで急落し、13年以来9年ぶりに数学Ⅱ・Bを下回った。その後、23年・24年と2年連続上昇して数学Ⅱ・Bを上回った。25年は大幅ダウンで数学Ⅱ・Bを下回ったが、26年は大幅アップ、27年はややダウンしたものの、2年連続で数学Ⅱ・Bを上回った。

一方、数学Ⅱ・Bは、22年に数学Ⅰ・Aを上回ったが、23年・24年と2年連続ダウンした。25年は3年ぶりに上昇して数学Ⅰ・Aを上回ったが、26年・27年ともダウンして数学Ⅰ・Aを下回った。27年の平均点39.3点は、10年の41.4点を下回る過去最低である。

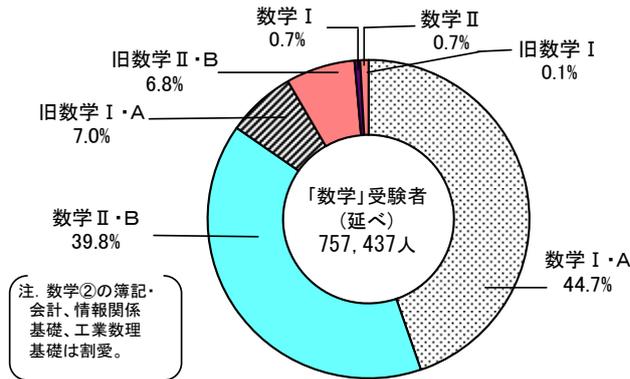
その結果、27年の数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bの平均点差は、22.0点差と、大幅に拡大した。



□ 数学2科目受験は、「数学Ⅰ・A + 数学Ⅱ・B」が約30万人(2科目受験者の83.5%)／
「旧数学Ⅰ・A + 旧数学Ⅱ・B」が約5万人(同13.9%)！

◎ 27年は、旧数学Ⅰ、旧数学Ⅰ・A、旧数学Ⅱ・Bが旧課程履修者用に「経過措置」として出題された。そのため、例年、数学2科目受験は「数学Ⅰ・A + 数学Ⅱ・B」が9割以上を占めるが、今回は新課程の「数学Ⅰ・A + 数学Ⅱ・B」83.5%と旧課程の「旧数学Ⅰ・A + 旧数学Ⅱ・B」13.9%に分散している。両者を合わせると、前年並みの97.4%である。

●「数学」延べ受験者の構成比（追・再試験含む）



●「数学」2科目受験者：358,789人の科目選択内訳（追・再試験含む）

	数 学 ②		
	数学Ⅱ (人)	数学Ⅱ・B (人)	旧数学Ⅱ・B (人)
① 数学Ⅰ	1,386 (0.4%)	588 (0.2%)	10 (0.0%)
数学Ⅰ・A	3,271 (0.9%)	299,474 (83.5%)	1,537 (0.4%)
旧数学Ⅰ	124 (0.0%)	10 (0.0%)	132 (0.0%)
旧数学Ⅰ・A	95 (0.0%)	1,045 (0.3%)	50,034 (13.9%)

注1. 数学②の簿記・会計、情報関係基礎、工業数理基礎は割愛。
2. ()内は、「数学2科目」実受験者に占める割合。
3. 太枠、網かけの枠は、「選択比率の高い」科目の組合せを示す。

■ **地歴・公民**；「地歴」全6科目が“平均点ダウン”。倫政経と倫理の平均点は、
大幅ダウンで“過去最低”！／「公民」受験者数、全科目“減少”！

□ 地歴と公民の受験者動向等

◎ 地歴・公民の試験枠の統合

地歴と公民の試験枠は統合されており、[地歴、公民]([])は試験枠を示す。以下、同)の全10科目から最大2科目の選択が可能である。

ただし、日本史Aと日本史Bなど、同一名称を含む科目同士の組合せ・選択はできない。

◎ 平均点は「地歴」全6科目ダウン、「公民」の倫政経、倫理は大幅ダウンで過去最低

地歴の平均点は、地理B-11.1点(得点58.6点)、日本史B-4.3点(同62.0点)、世界史B-2.7点(同65.6点)など、A科目も含め6科目すべてがダウンした。

公民は、「倫理、政治・経済」(以下、倫政経)が-7.7点(同59.6点)、倫理が-7.5点(同53.4点)で、ともに“過去最低”となった。倫理は平成2年～8年までは「社会」科目の「倫理、政治・経済」として出題され、9年から「公民」科目として単独で出題されている。2年～27

年までの倫理の平均点推移をみると、12年 54.4点、25年 58.8点、27年 53.4点以外、6割～7割の高得点である。

また、24年に再編、導入された倫政経の平均点を、2年～8年までの「社会」科目時代も含めてみると、例年6割以上で、27年の59.6点は初の5割台である。

なお、受験者の多い現代社会(本試験受験者数:7万6,698人)は+0.7点の前年並みであった。

◎ 地歴の受験者数“前年並み”(0.1%増)、公民は約7,000人(3.4%)の“大幅減”!

セ試の全受験者数(53万537人。追・再試験含む)が26年より0.3%減少した中、地歴の実受験者数(追・再試験含む)は、26年より461人(前年比0.1%)増の37万5,727人だった。全受験者数に占める地歴の「受験選択率」は、26年より0.3ポイント上昇の70.8%である。

他方、公民の受験者数は、26年より6,948人(同3.4%)減の19万8,513人だった。

出題科目や試験枠、受験方法等が大幅に変更された理科を除き、各教科・試験枠の受験者数を26年と比べると、地歴の微増以外、ほとんどが1%未満の減少(数学②は1.1%減)に留まっている中、公民の3.4%減が目立つ。また、公民の「受験選択率」も26年の38.6%から37.4%に低下した。

地歴と公民の延べ受験者数は、26年より7,243人(前年比1.2%)減の59万3,524人。

◎ 地歴と公民の各科目受験者軒並み減少の中、日本史B・地理Bが増加

地歴と公民の各科目受験者数(本試験)は、公民の全科目、及び地歴の日本史B(前年比1.4%増)と地理B(同0.3%増)以外、すべて減少した。

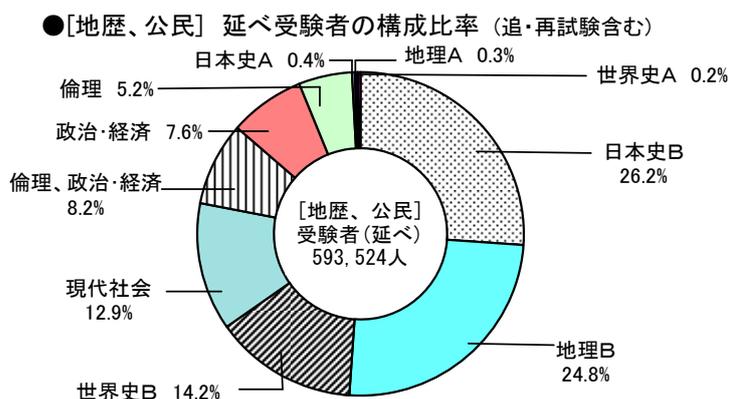
特に、公民の倫理(同8.9%減)と政治・経済(同6.3%減)の減少が大きい。

◎ 「第1解答科目」と「第2解答科目」

地歴、公民の試験枠である[地歴、公民]、及び理科「発展科目」の試験枠である理科②では、それぞれ最大2科目の選択・受験が可能である。

志望大学のセ試利用が“1科目利用指定”である場合、当該受験生は“本命1科目”に絞って「2科目選択・受験」(2科目試験枠)を「事前登録」し、“本命1科目”の解答に最大2倍近い解答時間(120分程)を掛けることが可能である。つまり、2科目受験の場合の解答科目の順番は受験者に任されることから、2科目受験者は「第1解答科目」の解答時間(60分)を、「第2解答科目」(本命科目)の解答に充てることもできる。

こうした、解答時間の“不公平”を是正する観点から、全ての国立大と大半の公立大、一部のセ試利用私立大では、“2科目試験枠”の受験者が“1科目利用指定”の学部等に出願した場合、「高得点科目」ではなく、「第1解答科目」の成績を合否判定に用いる。



□ [地歴、公民]“2科目受験”の状況

◎ 地歴と公民の2科目の実受験者数(追・再試験含む)は、26年より4,239人(前年比2.9%)減の14万1,401人である。2科目受験者の減少は、セ試受験者の減少に加え、理系志望者の“本命1科目”受験が増えたことなどによるとみられる。

試験枠[地歴、公民]の10科目(地歴A=3科目、地歴B=3科目、公民=4科目)から2科目を選択・受験する組合せは、全部で40通り(同一名称を含む組合せを除く)になる。

この40通りを地歴と公民の2教科の組合せで大別すると、次の3パターンになる。

(1)「地歴」1科目 + 「公民」1科目受験：約12万2,000人、87.0%

「地歴」1科目と「公民」1科目の組合せによる2科目受験者(実受験者。以下、同)は、26年より3,488人(前年比2.8%)減の12万2,081人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合87.0%)で、2科目受験者の9割近くを占める。このタイプの組合せは、24通りになる。このうち、「地歴B」と「公民」の受験が12万59人(同84.9%)で、圧倒的に多い。

科目別の組合せでは、日本史Bと現代社会の組合せが2万5,441人(同18.0%)／日本史Bと倫政経の組合せが1万5,931人(同11.3%)／日本史Bと政治・経済の組合せが1万3,546人(同9.6%)などとなっている。

①「地歴B科目」×「公民」受験：120,059人(84.9%)の内訳

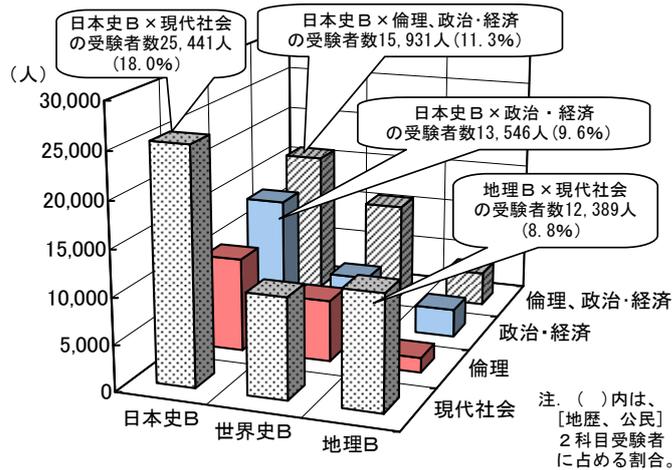
		公 民			
		現代社会 (人)	倫 理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地	日本史B	25,441 (18.0%)	10,226 (7.2%)	13,546 (9.6%)	15,931 (11.3%)
	世界史B	10,841 (7.7%)	6,696 (4.7%)	5,666 (4.0%)	10,857 (7.7%)
歴	地 理B	12,389 (8.8%)	1,637 (1.2%)	3,069 (2.2%)	3,760 (2.7%)

②「地歴A科目」×「公民」受験：2,022人(1.4%)の内訳

		公 民			
		現代社会 (人)	倫 理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地	日本史A	543 (0.4%)	128 (0.1%)	224 (0.2%)	21 (0.0%)
	世界史A	282 (0.2%)	81 (0.1%)	85 (0.1%)	22 (0.0%)
歴	地 理A	440 (0.3%)	51 (0.0%)	124 (0.1%)	21 (0.0%)

注。()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

●「地歴B」×「公民」受験者の内訳 (追・再試験含む)



(2)「地歴」2科目受験：約1万6,000人、11.5%

24年セ試から導入されている、地歴と公民の「試験枠」統合の要因にもなった「地歴」2科目受験については、受験者が26年より341人(前年比2.0%)減の1万6,305人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合11.5%)である。

ただ、受験者数は減少したものの、2科目受験者に占める割合は0.1ポイント上昇した。また、「地歴B」科目同士の2科目受験者は、26年より375人(前年比2.3%)減の1万5,936人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合11.3%)に減った。

「地歴」2科目受験による科目の組合せは、12通りになる。

科目別の組合せでは、日本史Bと世界史Bの組合せが6,756人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合4.8%)／世界史Bと地理Bの組合せが6,278人(同4.4%)のほか、日本史Bと地理Bの組合せが2,902人(同2.1%)となっている。

①「地歴B科目」×「地歴B科目」受験：15,936人(11.3%)の内訳

地歴	地歴	
	世界史B(人)	地理B(人)
日本史B	6,756 (4.8%)	2,902 (2.1%)
世界史B	—	6,278 (4.4%)

注：()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

②「地歴A科目」×「地歴A科目」受験：113人(0.1%)の内訳

地歴	地歴	
	世界史A(人)	地理A(人)
日本史A	64 (0.0%)	23 (0.0%)
世界史A	—	26 (0.0%)

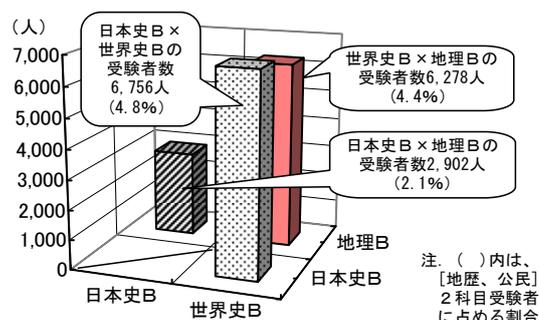
注：()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

③「地歴A・B科目」×「地歴A・B科目」受験：256人(0.2%)の内訳

地歴	A・B科目	受験者(人)
日本史	A科目×世界史B	61(0.0%)
	B科目×世界史A	59(0.0%)
世界史	A科目×地理B	47(0.0%)
	B科目×地理A	37(0.0%)
地理	A科目×日本史B	36(0.0%)
	B科目×日本史A	16(0.0%)

注：()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

●「地歴B」2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



注：()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

(3)「公民」2科目受験：約3,000人、2.1%

「公民」同士2科目の組合せは4通りで、受験者は26年より410人(前年比12.0%)減の3,015人([地歴、公民]2科目受験者に占める割合2.1%)である。

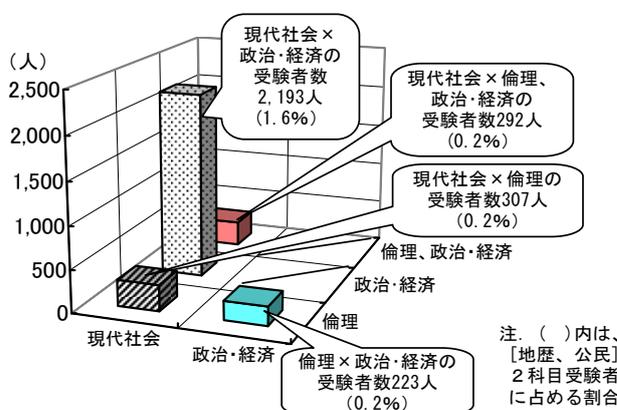
科目別の組合せでは、現代社会を基軸に、政治・経済との組合せが2,193人(同1.6%)／倫理との組合せが307人(同0.2%)、倫政経との組合せが292人(同0.2%)などである。

●「公民」4科目から2科目受験：3,015人(2.1%)の内訳

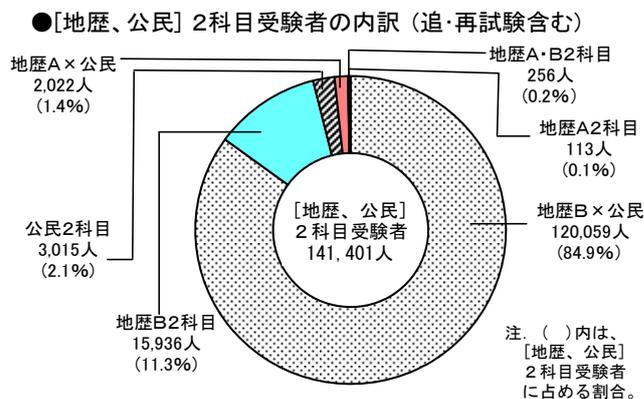
公民	公民		
	倫理(人)	政治・経済(人)	倫理、政治・経済(人)
現代社会	307 (0.2%)	2,193 (1.6%)	292 (0.2%)
政治・経済	223 (0.2%)	—	—

注：()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

●「公民」2科目受験者の内訳(追・再試験含む)



注：()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。



■理科;新課程「基礎科目」受験者約 13 万人、「発展科目」受験者約 21 万 2,000 人!
「選択パターン」別受験者比率:A=35%、B=10%、C=5%、D=50%!

□ 新課程「理科」の選択解答方法

セ試の新課程「理科」は、新しい学習指導要領に対応して、物理・化学・生物・地学の4領域の各「基礎科目」(標準2単位)を理科①に、各「発展科目」(標準4単位)を理科②に配置し、全8科目を次のようなA~Dの“4パターン”のいずれかによって選択解答する。

- A = 「基礎2科目」: 物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎から2科目選択解答。(4単位相当)
- B = 「発展1科目」: 物理、化学、生物、地学から1科目選択解答。(4単位相当)
- C = 「基礎2科目+発展1科目」: 物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎から2科目、及び物理、化学、生物、地学から1科目選択解答。(3科目選択解答: 8単位相当)
- D = 「発展2科目」: 物理、化学、生物、地学から2科目選択解答。(8単位相当)

◎ 選択解答の留意事項

- 「発展科目」については、旧課程で“選択履修”であった項目が“必修化”されたが、受験者の大幅な負担増にならないように“一部に選択問題”が配置されている。
- 理科①(基礎科目: 50点満点)については、“1科目のみの受験は認められない”。試験時間は2科目で60分。
- 理科②(発展科目: 100点満点)の試験時間において2科目を選択する場合、解答順に「第1解答科目」及び「第2解答科目」に区分して各60分間で解答する。「第1解答科目」と「第2解答科目」の間の答案回収等の時間を含め、合計時間(130分)が試験時間となる。
- 選択解答方法(A~D)は、出願時に「事前登録」する。
- 選択解答方法Cにおける「基礎科目」と「発展科目」の組合せで、同一名称を含む科目同士の選択については制限されず、同一名称を含む科目同士の選択は可能である。
ただし、セ試を利用する大学(学部)によっては、「基礎科目」と「発展科目」における同一名称を含む科目の組合せを不可としているところがある。
なお、地歴と公民では、同一名称を含む科目の組合せで2科目選択はできない。
- 27年セ試に限り、旧課程履修者(既卒者)用に旧課程科目の理科総合A、理科総合B、物理I、化学I、生物I、地学Iが理科②の試験枠に配置された(経過措置)。

旧課程履修者は新課程科目(A~Dの選択解答方法による)又は旧課程科目(1科目または2科目を選択)から選択解答した。なお、新・旧課程科目の組合せはできない。

□ 受験者の動向

◎ 理科①の受験状況

(1) 「基礎科目」の科目別受験選択率：生物基礎 89.8%、化学基礎 68.0%

理科①に配置された「基礎科目」の実受験者数約13万人の受験状況は、次のとおりである。

生物基礎は受験者数11万6,640人、理科①の実受験者数に占める割合89.8%／化学基礎は8万8,308人、同68.0%／地学基礎は4万1,633人、同32.0%／物理基礎は1万3,301人、同10.2%で、「基礎科目」受験は生物基礎と化学基礎が中心となっている。

(2) 「基礎2科目」の組合せ：

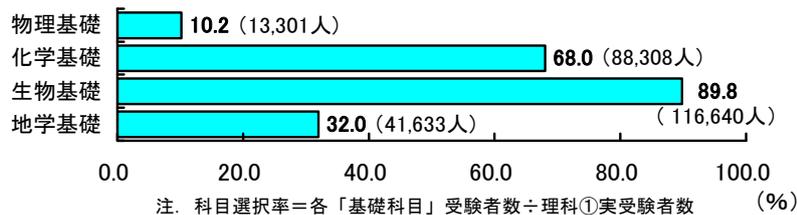
「生物基礎＋化学基礎」58.4%／「生物基礎＋地学基礎」29.3%など、“文系色”反映！

「基礎科目」は“2科目受験が必須”となっているが、受験科目の組合せ状況は、次のとおりである。

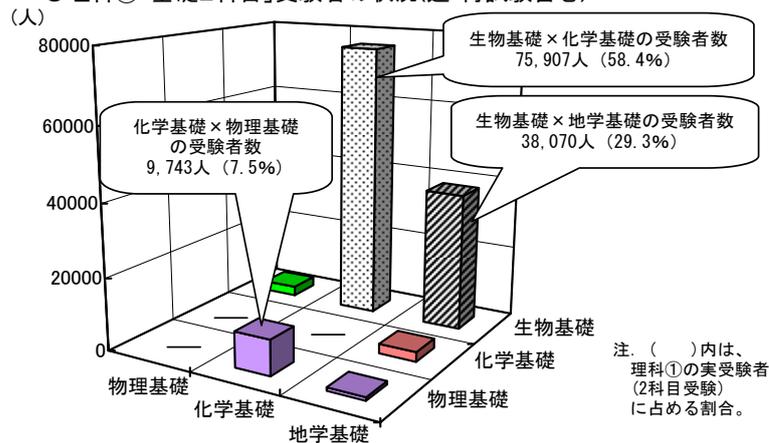
「生物基礎＋化学基礎」は受験者数7万5,907人、科目選択率58.4%(理科①の実受験者数に占める割合)／「生物基礎＋地学基礎」は受験者数3万8,070人、同29.3%／「化学基礎＋物理基礎」は受験者数9,743人、同7.5%など。

「基礎科目」は、生物基礎を中心に化学基礎や地学基礎との組合せが主体で、“文系志望者”受験を反映した結果となっている。

●理科①受験者の「基礎科目」別選択率(追・再試験含む)



●理科①「基礎2科目」受験者の状況(追・再試験含む)



●理科①：「基礎2科目」受験者数129,924人の科目選択内訳(追・再試験含む)

		理科①			
		物理基礎(人)	化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)
理科①	物理基礎	—	9,743 (7.5%)	2,644 (2.0%)	908 (0.7%)
	化学基礎	—	—	75,907 (58.4%)	2,652 (2.0%)
	生物基礎	—	—	—	38,070 (29.3%)

注. ()内は、「基礎2科目」受験者に占める割合。

◎ 理科②の受験状況

(1) 「発展科目」受験者：26年の旧「理科Ⅰ」より約15万4,000人、約42%減の約21万2,000人！
理科①を含む「理科」全体では約6,000人、1.5%減！

理科②に配置された新課程「発展科目」の実受験者数は21万2,304人で、26年の旧「理科Ⅰ科目」（標準3単位）の実受験者数より約15万4,000人、約42%の大幅減である。これは、「基礎科目」と「発展科目」に再編され、試験枠も主に文系志望者が受験する理科①（基礎科目）と主に理系志望者が受験する理科②（発展科目）に2分割されたためである。

因みに、27年の「理科」全体（理科①＜基礎科目＞、理科②＜発展科目、旧科目：理科①の重複受験者を除く＞）の実受験者数は約38万3,000人で、26年の「理科」全体（理科Ⅰ科目、理科総合A＜標準2単位＞、理科総合B＜同＞）の実受験者数約38万9,000人より約6,000人、1.5%の減少である。

なお、理科②のセ試全受験者数に占める受験選択率は前述したように50.9%であるが、旧課程の理科総合A・理科総合Bの実受験者数(1,116人)を除くと、50.7%となる。

(2) 「発展科目」の延べ受験者の構成比：

化学46.8%／物理34.5%／生物18.2%など、“理系色”反映

「発展科目」の延べ受験者数37万5,015人の各科目の構成比率は、次のとおりである。

化学46.8%（受験者17万5,387人）／物理34.5%（同12万9,272人）／生物18.2%（同6万8,361人）／地学0.5%（同1,995人）。

各科目の構成比率を26年（旧「理科Ⅰ」）と比べると、化学の比率がアップし（26年：化学Ⅰ37.5%）、生物と物理の順位が入れ替わっている（26年：生物Ⅰ30.2%、物理Ⅰ25.8%）。

つまり、新課程「理科」では、「発展科目」は旧「理科Ⅰ科目」よりも一段と理系志望者を中心にして、化学や物理の科目選択の比率が高まったことが伺える。

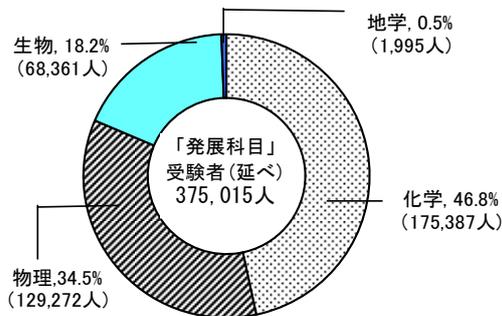
◎ 「選択パターン」別受験状況

(1) 新課程セ試「理科」受験者の“2人に1人”は、「発展2科目」の“Dパターン”！

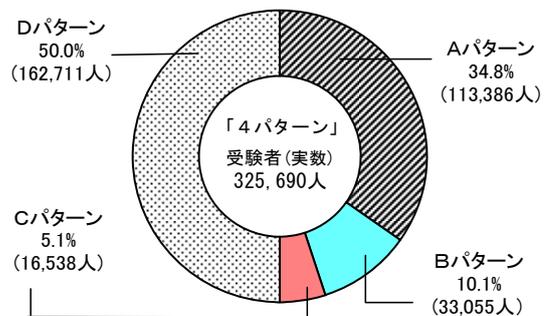
新課程のセ試「理科」は、前述のようにA～Dの4パターンからの選択受験となる。

27年の各「パターン」別受験者（旧課程履修者含む）の4パターン受験者実数32万5,690人に占める割合は、次のとおりである。

●理科②「発展科目」延べ受験者の構成比率
(追・再試験含む)



●理科「選択パターン」別受験状況
(追・再試験含む)



Aパターン：34.8%（受験者数 11 万 3,386 人）／Bパターン：10.1%（同 3 万 3,055 人）／
Cパターン：5.1%（同 1 万 6,538 人）／Dパターン：50.0%（同 16 万 2,711 人）。

新課程「理科」のセ試受験者の“2人に1人”が「発展2科目」（8単位相当）の“Dパターン”を受験していることが注目される。

また、看護・医療系などにみられるCパターン（基礎2科目＋発展1科目：8単位相当）は、約5%に留まっている。

(2) A：「生物基礎＋化学基礎」主体 / B：生物、物理、化学の1科目選択比率ほぼ“均等”
C：「生物基礎＋化学基礎＋生物」主体 / D：「化学＋物理」主体

A～Dの各パターンの科目選択の内訳をみると、およそ次のようになっている。

Aパターンは、「生物基礎＋化学基礎」が50%台で主体／Bパターンは生物、物理、化学の1科目選択比率がそれぞれ30%台でほぼ均等／Cパターンは、「生物基礎＋化学基礎＋生物」が40%台で主体となっている。また、Dパターンは「化学＋物理」が70%台、「化学＋生物」が20%台である。

◎「理科」旧科目受験者は、約5万8,000人

27年に限り、旧課程履修者（既卒者）の「経過措置」として、旧課程科目（理科総合A、理科総合B及び各「理科I科目」：計6科目）が理科②において出題された。これら旧科目の実受験者（既卒者）数は、5万7,644人であった。

そのうち、4万1,646人が2科目を受験。2科目の組合せは、「化学I＋物理I」が64.6%／「化学I＋生物I」が30.9%で、例年とほぼ同様の割合であった。

なお、旧「理科I」の実受験者数は5万6,528人、理科総合A・理科総合Bの実受験者数は1,116人であった。

●Aパターン：実受験者数113,386人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理 科 ①			
		物理基礎(人)	化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)
理 科 ①	物理基礎	—	5,507 (4.9%)	1,987 (1.8%)	806 (0.7%)
	化学基礎	—	—	66,188 (58.4%)	2,268 (2.0%)
	生物基礎	—	—	—	36,630 (32.3%)

注. ① 理科①(基礎科目)から2科目を選択受験。
② ()内は「Aパターン」の実受験者に占める割合。
③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Bパターン：実受験者数33,055人の科目選択内訳（追・再試験含む）

理 科 ②			
物 理(人)	化 学(人)	生 物(人)	地 学(人)
10,370 (31.4%)	9,986 (30.2%)	12,374 (37.4%)	325 (1.0%)

注. ① 理科②(発展科目)から1科目を選択受験。
② ()内は「Bパターン」の実受験者に占める割合。
③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Cパターン：実受験者数16,538人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理 科 ①					
		物 理 基 礎			化 学 基 礎		生 物 基 礎
		化学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)	生物基礎(人)	地学基礎(人)	地学基礎(人)
理 科 ②	物 理	2,135 (12.9%)	169 (1.0%)	40 (0.2%)	398 (2.4%)	52 (0.3%)	19 (0.1%)
	化 学	1,721 (10.4%)	355 (2.1%)	43 (0.3%)	1,865 (11.3%)	65 (0.4%)	93 (0.6%)
	生 物	353 (2.1%)	123 (0.7%)	12 (0.1%)	7,308 (44.2%)	235 (1.4%)	731 (4.4%)
	地 学	27 (0.2%)	10 (0.1%)	7 (0.0%)	148 (0.9%)	32 (0.2%)	597 (3.6%)

注. ① 「理科①(基礎科目)から2科目＋理科②(発展科目)から1科目」の選択受験。
② ()内は「Cパターン」の実受験者に占める割合。
③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

●Dパターン：実受験者数162,711人の科目選択内訳（追・再試験含む）

		理 科 ②			
		物 理(人)	化 学(人)	生 物(人)	地 学(人)
理 科 ②	物 理	—	114,951 (70.6%)	762 (0.5%)	376 (0.2%)
	化 学	—	—	46,149 (28.4%)	159 (0.1%)
	生 物	—	—	—	314 (0.2%)

注. ① 理科②(発展科目)から2科目を選択受験。
② ()内は「Dパターン」の実受験者に占める割合。
③ 太枠、網かけの枠は“選択比率の高い”科目の組合せを示す。

□ 新課程「理科」平均点

◎ 平均点は「基礎・発展科目」とも、物理・化学系 6～7 割台、生物・地学系 4～5 割台！

新設された「基礎科目」の平均点(50 点満点)を得点率でみると、物理基礎 63.0%、化学基礎 70.6%、生物基礎 53.3%、地学基礎 54.0%である。

他方、「発展科目」の平均点(100 点満点)を得点率で示すと、物理 64.3%、化学 62.5%、生物 55.0%、地学 40.9%である。

これらの結果をみると、理科の平均点は、「基礎・発展科目」とも物理・化学系は 6～7 割台の高得点、生物・地学系は 4～5 割台の低得点といった 2 つに分化していることが浮かび上がってくる。

これは、理系、特に物理・化学領域(発展 2 科目)を主体とする理・工学系志望者層と、化学・生物・地学領域(基礎 2 科目や発展 1 科目)を主体とする文系ないしは看護・医療系、農学系などの志望者層によって、選択受験科目の系列が 2 極化していることが伺える。

◎ 化学-6.9 点、地学-9.3 点の大幅ダウン。地学は“過去最低”の 40.9 点！

「発展科目」の平均点を 26 年の旧「理科 I 科目」と比べると、化学が-6.9 点の大幅ダウンで 62.5 点、地学も-9.3 点の大幅ダウンで 40.9 点となり、地学は共通 1 次時代(昭和 54 <1979>年～平成元<1989>年)を含め、“過去最低”となった。

一方、物理は+2.7 点の 64.3 点、生物は+1.7 点の 55.0 点(得点調整後の平均点)であった。

□ 17 年ぶりの「得点調整」、理科②で実施！

◎ 「旧・物理 I (69.93 点)」-「生物(48.39 点)」=21.54 点：理科②で「得点調整」実施！

27 年の「得点調整」対象科目は、旧課程科目も含めて次の 4 教科 18 科目に及んだ。対象科目間で原則“20 点以上”の平均点差が生じ、これが“試験問題の難易差”に基づくものと認められる場合、受験者数が“1 万人未満の科目”を除いて「得点調整」を行うとされた。

<27 年の「得点調整」対象科目>

- 地歴の世界史 B、日本史 B、地理 B の間 / ●公民の現代社会、倫理、政治・経済の間
- 数学①の数学 I・A と旧数学 I・A の間 / ●数学②の数学 II・B と旧数学 II・B の間
- 理科②の物理、化学、生物、地学、旧・物理 I、旧・化学 I、旧・生物 I、旧・地学 I の間

◎ 物理、化学、生物、旧・化学 I、旧・生物 I の各素点に応じ、最大 8 点を加点！

大学入試センターは 1 月 23 日時点(受験者集計 53 万 126 人)で、理科②の旧・物理 I (69.93 点)と生物(48.39 点)の平均点差が 21.54 点に達し、この平均点差が両科目の「試験問題の難易差」によるものと判断し、17 年ぶりに「得点調整」を実施した。

今回は、理科②のうち、受験者数が 1 万人未満であった地学と旧・地学 I は調整対象科目から除外。また、平均点が最高となった旧・物理 I を除き、物理、化学、生物、旧・化学 I、旧・生物 I の受験者は、それぞれの素点に応じ、最大 8 点が加点された。

平均点最低の生物には 1～8 点(素点が低い、または高いほど加点は小さい。例えば、素点が 6 点、9 点～12 点、95 点～98 点だと 1 点加点され、41 点～61 点だと 8 点加点され、0 点～5 点及び 7・8 点と 99 点以上は加点されなかった) / 化学には 1～5 点 / 物理には 1～4 点 / 旧・生物 I には 1～5 点 / 旧・化学 I には 1～3 点がそれぞれ素点に応じて加点された。